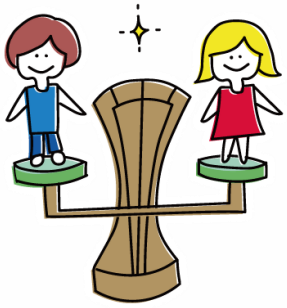
「誰が決めたの？」　7月号

～「こころの扉」を少し開いてみませんか～

先日、庭の草取りをしていたとき、通りがかりの高齢女性が私を見て「暑いのに大変じゃなあ。しかし、草取りは女がするもんじゃ」と言って通り過ぎました。草取りを誰がしようといいじゃないかと思いながら、なぜ草取りを女性の仕事と決めつけているのか疑問も残りました。

社会の中では、今なお男女の役割を固定的に捉える意識が根強く残っていて、家庭や職場で差別を生む要因となっています。また、女性に対しては内助の功や女性ならではの細やかさなどの表現があり、女性は1歩下がり支えるべき存在という偏見がみられます。男性に対しても、男たるものや大の男がなど性別に基づく思い込みを押しつけられ、嫌な思いをする人もいます。

このような見方や考え方は、幼い頃からの環境によっても形成されていきます。幼い頃から「男らしく」「女らしく」と育てられ、知らず知らずのうちに男女の固定的イメージが植えつけられていきます。そして、男女の態度や行動を決める基準になってしまうのです。このような思い込みや決めつけは、多かれ少なかれ誰もが持っています。それは時として、偏ったものの見方やゆがんだ思い込みを生み、誰かを傷つけてしまいます。

男だから女だからといった決めつけをなくし、一人の人間として能力を発揮できるような社会にしていきたいものです。そのためにも、社会の制度や古いしきたりによって男女のどちらかが不利な立場になったり、男女の行動を分けたりしていないかを考え変えていく必要があります。

まずは自分の中にある「決めつけ」に気づくことから始めてみましょう。